



## 特別対談

脳科学者  
茂木健一郎  
×  
画家  
大竹寛子

Preview

# 大竹寛子帰国記念展

【会期】 3月29日(水)～4月4日(火)  
【会場】 西武池袋本店 6階(中央B8)＝西武アートフォーラム  
豊島区南池袋1-28-1  
☎03(5949)5276(直通)

文化庁の新進芸術家海外研修制度で1年間ニューヨークに留学した大竹寛子。帰国後初個展となる今展を前に、親交があり様々なフィールドで活躍する脳科学者・茂木健一郎氏と対談が実現した。大竹が桜を描いたパークホテルの一室で、二人の出逢いの経緯から絵画表現の可能性まで話は広がった。

——茂木さんは2002年～07年まで東京藝術大学で非常勤講師を務めていますが、お二人の出逢いから教えて下さい。

大竹 茂木先生の授業はゲストが多彩で面白いと学内で噂になっていました。そんな中で、日本画第一研究室の講習会をやって頂こうと、私が企画書を持ってお願いに伺ったんです。その時初めてお目にかかりました。

茂木 講習会は大学の正木記念館だったね。大竹さんの作品は画面から圧力を感じたのを覚えていて、伝統的な技法を使いながら感性が凄く現代的だった。それに制作の構えみたいなものが、野球でいうところのバントのようにそつなく纏めようとせずに、バットを振りにいっていた。「今、ここからすべての場所へ」のカバーを発案したのは担当の編集者で、絶対にそれが良いと二秒で決めました(笑)。

大竹 凄く光栄なことだったのと、2月3日に本が届いたのですが、丁度私の誕生日だったのでこれは運命だったんだと

### もぎ・けんいちろう

1962年東京生まれ。脳科学者。ソニーコンピュータサイエンス研究所シニアリサーチャー、慶應義塾大学特別研究教授。東京大学理学部、法学部卒業後、東京大学大学院理学系研究科物理学専攻課程修了。理学博士。理化学研究所、ケンブリッジ大学を経て現職。専門は脳科学、認知科学。2002年～07年まで東京藝術大学非常勤講師。05年『脳と仮想』で第4回小林秀雄賞受賞。09年『今、ここからすべての場所へ』(筑摩書房)で第12回桑原武夫学芸賞を受賞。

### おおたけ・ひろこ

2006年東京藝術大学絵画科日本画専攻卒業。11年同大学大学院修了。博士号取得。15年～16年文化庁新進芸術家海外派遣制度にてニューヨークに留学。個展、グループ展多数。





「Spring vol.4] 20号F



「Circulation vol.4] 20号P



「生命の記憶] 25号P



「Flowers vol.9] 10号F

思いました。

茂木 東京藝大は学生として過ごすのにとっても良い環境だし、絵画史を基本に据えた本格志向の学生が多い。でも芸術至上主義みたいなところもあるから、それを今の世界の中でどう表現するかというのが大事なだろうね。日本画という独特な枠組みもあるし。

大竹 藝大生は描くのはもちろん上手いですが、学内にいると自分の制作のことに考えられなくなってしまうんです。私も日本画材を使用しているのですが、日本画という言葉のイメージだけで作品を観られてしまうと、伝えたいことが伝わらないこともあるように思っています。

茂木 日本画も昔は室内装飾の一部だったから、この部屋はまさにそうした日本画の基になった、絵画の在り方を考えさせられるね。

大竹 このパークホテルの客室に描くにあたって、例えば角をどう使って効果的に表現するかに気をつけました。伝統的な日本画はもっと空間的だったと思うし、それはこれからも意識していきたいところです。

茂木 だから日本画を否定する必要はないし、むしろそこに可能性がある。本来建築と一体化していて、それを現代にどう表現するかがポイントなんだ。現在の作品の流通のしかたも、あくまで作品として流通しているのが基本だけど、こうしたコミッションワークが展開できるパトロンが存在もより重要になるんだろうね。



——ニューヨークに留学してみて、外から日本画をみるとどうですか？

大竹 海外では日本画という言葉を意識する必要が無いので、平面の作家として勝負しようと思うことができるようになったことと、コンセプトに対する向き合い方が変わりました。視覚的なものだけでなく、どうしたらもっと伝わるのか。ただ綺麗と誉めて頂けるだけでなく、流動的なものだからこそ普遍的なものがあ

るはずという、私が絵を通して表現したいことを深く考えることが出来ました。

茂木 先日ロンドンのサーチ・ギャラリを散歩していて、やはりアートの中心地に滞在しないとわからないことがあると気づいた。まずスケールが大きくて、身体性が違う。日本で感じる細やかさの良さは全く違う。他者は自分を写す鏡だから、大竹さんはニューヨークという他者の土地に行つて、きつと違う鏡に写



「Floating instant」 150号F

つた自分をみたはずなんです。その変化は現在進行中で徐々に育っていくものなので、これからの変化も楽しみです。ニューヨークはマーケットの構造もグローバルだし層も厚いだらうし。

大竹 マンション内部の吹き抜けに滝が流れ落ちていくウォーターホール・ギャラリーや、超高級百貨店のバーグドルフ・グッドマンなどで作品を発表できたのは凄く良い体験です。今はそうした体験を通して感じたことを実践しているところなんです。日本画という言葉にとられすぎないで、でも余白や空気感、精神性といったアイデンティティを大切に、現代に通用するアートをつくっていきたいです。

茂木 ポスト・トゥルースという言葉が話題になっていくけれど、アートにもいろんなものがあつて、アートは単一の文脈が支配する世界ではないと思う。それが今後はもっと見分けられるようになるんじゃないかな。

——蝶をモチーフとして多用しています。茂木さんも蝶を研究していましたね。茂木 作品の蝶は間違いない正しい蝶です(笑)。大竹さんにとつての蝶とは？大竹 育つた環境には近くに山があつて、沢山の蝶が群生していました。蝶は完全変態なので、幼虫がさなぎを経て蝶になったら全然違う形になるんです。蝶の一生は、幼虫の状態をさなぎの段階で完全に否定して、全然違うものになることが凄く面白かった。そして、違うからこそ今があるんです。蝶を調べていくと、私

が気になっている言葉に出逢うことも多くあります。

茂木 さなぎの時に幼虫だった頃の細胞は全部消えて、幼虫の一部だった成虫になる細胞が増える。よくできているよね。

大竹 他にも例えば蕾が花になるけれど形は全く違うし、枯れることで実ります。変化そのものが必要なことなんです。

茂木 生死、循環を描いているわけだ。大竹 そうです。焼箔をつかうのは生と死を同一画面に描くことで、相反するところが同時に起きていることを表現しています。

茂木 一つの絵の中にもいろんな世界が通り過ぎていく。日本画の伝統や画家の人生、蝶、自然など本当にいろんな要素がある。だから気に入った作品を持っていくと作品と共に自分も育つし、見る毎に変わつていきます。それに絵にはオリジナルが1点しか存在しない凄みもあるよね。自分の人生もその絵に見合うものにならなければいけないというか、絵の強度に負けないためにはこちら側も強くならなくてはと思う。絵というのは稼いだお金で消費するものではなく、身近に置くことで例えば良い仕事ができたりする、生産財だと思ふんです。そういうつきあい方ができるのが良い絵なんだろうね。大竹さんの作品をリビングと玄関に飾っているけれど、とても評判が良いですよ。

大竹 ありがとうございます。今度の個展に向けて、いつでも見返すことが出来るような良い絵を描いていきたいです。